

矢田部会編『特命全権公使 矢田部保吉』（個人書店、東京、2002年）所収

矢田部公使のタイ研究及び留学生事業——今日への遺産

村嶋英治

最初に少々私事に亘るが、筆者が矢田部保吉公使（一九四二年六月二十日に特命全権大使に信任されたが、本稿は在タイ公使時代を中心としているので当時の肩書きを用いる）の業績と巡り会った経緯を紹介したい。筆者は一九七四年に大学を出てアジア経済研究所に就職し、タイ研究に従事することになった。最初の十数年は、タイ政治経済の現状調査・分析を中心としていたが、八〇年半ばからは、タイ近現代史研究へとシフトした。とりわけ、八七年半ばから二年間、在タイ日本大使館に専門調査員として勤務してからは、戦前戦中の日タイ関係史への関心を高めた。タイ近現代史は日本との関係が深いにもかかわらず、大使館員も含めた日本人の殆どが、正確な知識を欠いていると実感したこと、加えて、当時はタイ人学生や学者で、戦前戦中の日タイ関係研究に関心を持つ者が多かったが、彼らと交流して自分の無知を認識したことが、契機であった。八九年に帰国して、戦前戦中に在タイした日本の軍人、外交官、ビジネスマンなど、多くの関係者に、各地でインタビューを行った。当時は戦中に重要な地位に在った人々にインタビューできる最後のチャンスであった。九一年には、大学に職を得て比較的自由な研究時間に恵まれることになった。それから九八年までは、与えられた研究時間の大半を、タイ、日本、イギリス、ア

メリカ、台湾の公文書館や外交史料館で費やした。同時に、国会図書館をはじめ様々な図書館で、タイ近現代史関係の雑誌記事や単行本を渉猟した。

このような中で、矢田部保吉公使の大量の著書、雑誌論文、公信・公電等に遭遇することができた。驚いたのは、その精緻さと質の高さである。矢田部公使がタイに在勤した時代は、タイに最も影響力を有したのはイギリスである。そのイギリスの外交記録と比較しても、矢田部公使の記録、報告は質量ともに、勝るとも劣らないのである。爾来筆者は一九三〇年代のタイ研究資料の二大宝库は、矢田部公使の報告等を保存する日本の外交史料館と、イギリスの国立公文書館であると確信している。

矢田部公使の職務上の報告、それを基にした著作を、同公使のタイ研究の成果であるとするならば、それらは、執筆当時に於いて極めて高い水準にあったのみならず、今日においても、タイ近現代史研究の基本文献であり、古典であると評価することができる。もし、これらが英文で書かれていたならば、矢田部公使と同時期に駐シャム公使として在任したクロスビー英公使の著作と少なくとも同程度以上には引用され、研究者に知られた存在となっていたであろう。二〇〇三年一月に出版された『岩波講座、東南アジア史』の別巻（東南アジア史研究案内）一四五頁においても、筆者は戦前期のタイを研究するには、矢田部保吉公使の著作、報告等が必読であることを強調しておいた。



矢田部保吉胸像

日本人の戦後東南アジア研究者の中には、海外の資料や研究を珍重する一方で、足下の自国に価値ある資料や研究が豊富に存在することには気づかない人が多かった。そのため一九八〇年代までの戦後日本のタイ近現代史研究においては、矢田部公使のタイ研究上の業績が参照されることは殆どなかったと言ってよい。この時期に書かれた日本人タイ近現代史研究者の立憲革命研究や憲法研究等と、矢田部公使がその四〇年近く前に同一主題で著したものとを比較すると、前者は後者に遙かに及ばないという印象を免れ難い。幸い筆者は、矢田部公使の研究成果に触れる機会を得て、その一部を『ビブーン』（岩波書店）、『タイ華人の政治』（チューラーロンコーン大学アジア研究所、タイ語）等の著作において利用することができた。

話はかわるが、矢田部公使は、バンコクの在留邦人から深く敬愛された外交官でもあった。そのことは、暹羅公使退任後三年を経た一九三九年三月十九日に、暹羅日本人会より胸像贈呈を受けたことによく示されている。その記事に曰く、「暹羅日本人会では矢田部元公使が盤谷在任中日暹親善及在暹同胞保護誘導の爲め尽されたる労を感謝、記念すべく同公使胸像贈呈の件を議決其製作を東京資生堂立体写真銅像部に依頼中であつたが此竣工を見たので去三月十九日東京渋谷の同公使邸で贈呈式を挙げた。当日、日本人会を代表して前会長三原博士岡崎前理事出席、三原前会長は三木会長の贈呈之辞を代読、矢田部元公使鄭重なる謝辞を述べられ和氣藹々の裡に式を終了した。因に同胸像は出来栄え頗る良く風貌生けるが如きものあり。暹羅日本人会よりの胸

像贈呈は之れを以て嚆矢とする。」(『暹羅協會会報』第一五号、一九三九年六月、一三八頁)、と。

言うまでもなく、矢田部公使の業績の全体像を正しく把握するためには、外交官としての矢田部公使に焦点を当てた研究が必要である。これについては、既に矢田部厚彦大使の『外交フォーラム』(二〇〇二年、本書に再録)上の論考が存在するが、筆者も数年後には、一九三〇～四〇年代の日タイ関係を中心としたタイ政治・外交史の研究書において、詳述したいと思っている。

本稿では、矢田部公使が在任中及び退任後一貫して取り組んだ、中国朝鮮以外のアジアからの留学生支援事業、および日本人の東南アジア研究者育成について、史料を基に少々光を当ててみたい。

二〇〇二年五月一日現在日本に学ぶ留学生総数は、九五、五五〇人の多人数に上る。今日から顧みると、矢田部公使は中国朝鮮以外からの留学生受け入れの黎明期における、留学生支援事業の草分であり、今日の留学生受け入れの隆盛の基礎を築いた先駆者である、と言うことができる。外交記録から見る限り、矢田部公使が日本へのタイ人留学生派遣支援に関心を高めたのは、一九三四年(昭和九年)である。この年に、国際学友会の創立に結実する意見具申を行い、同時に、名古屋松坂屋主伊藤次郎左衛門によるタイ人留学生に対する奨学金・宿舍等支援事業の創立にも尽力している。まず、前者について見ると、

一九三四年九月二十四日付け、廣田弘毅外相宛て公信第一五三号「留日暹羅学生の為にする保護指導機関設置の急務に関する件」に依つて、矢田部公使は次のような意見具申を行った。即ち、「昨年以來暹羅人子弟の日本留学希望者続出の模様にして、現に昨年春以來留学の目的を以て本邦に渡航する暹羅人学生に対し当館に於て旅行券査証を与へたるもの二五名に上り居り 最近の傾向を察するに日本留学希望者は今後益々増加せんとするものの如くなり。然るに彼等日本留学希望者は未だ先輩留学生も少く、父兄近親の日本の事情を熟知せるもの無く、勿論日本に格別の寄迎もなく、従て渡日後の宿所、希望学校の選定入学の手続等皆目不案内なるが為に渡日決行を躊躇せしめられ居る有様なり」と、タイからの留学希望者増大の状況を説明したのち、「最近の情勢に適應する為には本邦に於て至急適當なる保護指導機関を設け、暹羅人学生をして該機関をたよりて渡日せしめ、其の宿所、希望学校の選択、入学手続、日本語の予習等に付該機関の斡旋に待たしむることとするは是非共必要なり。渡日学生の数未だ多からざる此際特別の機関を作ること困難なるが如くにも見ゆれども実は今日留学熱の將に大に起らむとする此際こそ最も其の必要を痛感する次第に有之。……其の規模と機能に至りては費用との関係もあり、当方に於て立案すること差当り困難なるが、要するに当方としては最近漸次続出の傾向ある渡日暹羅青年学生の為に適當なる差向け先を設けることに付至急本省当局の具体的考慮を仰ぎ度く存する次第なり」(外交史料館 I.1.2.0.3.1)、と具申したのである。守島伍郎東亜局第一課長は、この公信を、

十月十九日付けで、大臣、次官、東亜局長、文化事業部長に「本邦に留学する暹羅学生は急速に増加しつつあり。之が指導監督機関設置の急務なることは論ずる迄もなき所なり。東亜局に於ても文化事業部等と連絡し種々画策しつつある処何分金銭の問題を伴ふ故 おいそれとは運ばざる現状なるが、然し何とかせねばならぬ義と存ず」という意見を付して提出した。十一月二十八日には、東亜局長、文化事業部長、会計課長等が出席し、対暹文化事業打合会が行われ、留日暹羅国学生指導監督機関設置の件も協議された。これらの動きは、結局、翌一九三五年十二月十八日に外務省直轄（文化事業部所管）の外郭団体として、国際学友会の設立として結実した。

当時、中華民国、満州国からの留学生のためには、受け入れ施設が少なくはなかったが、それ以外のアジアからの留学生用の施設は皆無の状態であった。国際学友会の趣意書は、「東方諸国例へば暹羅、比律賓、印度等亦留学生を派するものに多きを加へ更に是等諸国は外国留学生に関する我施設の如何により益々多数の学生を派遣せむとするの趨勢にあり。外国人青年子弟の来り学ばむとするに当り必要の施設を講じて之を保護善導し其の業を成さしむるは実に文明国家の責務たると共に国際の融和を増進し人類の文化を発展し又通商貿易の伸張を計る所以なり」（外交史料館 I.100.218）と述べている。この趣意書からも、国際学友会設立の目的としては、中国満州国以外のアジアからの留学生の急増に答へようとするものであると同時に、中国人留学生の多くが反日になった苦い経験を繰り返さないため、アジアからの留学生を善導しようという目

的もあつたことが判る。国際学友会は、国庫助成金により会館を設立し留学生に宿舍を提供した外に、日本語教育、進学先の斡旋、奨学金支給を行った。同会の活動は、アジアだけに限定されず、欧米や南米からも交換留学生招致学生を迎え、便宜与えた。また、日米学生会議や日比学生会議にも補助金を出している。しかし、国際学友会の主要な事業は、国際学友会館の経営であった。一九三六年五月二十五日時の同会館の在館学生数は、二七名であるが、このうち一五名はタイからの私費留学生であった。四一年一月の在館者数四三名中二〇名はタイ人であり、一九四〇年十月一日に開寮した国際学友会女子寮の在館者一〇名は全員タイ人であった。戦前戦中においては、国際学友会館の在館生は、タイからの留学生がほぼ半数を占める。

次に、伊藤次郎左衛門の奨学事業に関しては、矢田部公使は一九三四年十一月十九日付け「留日暹羅人学生奨学資金設定計画に関する件」と題した、廣田弘毅外相宛て公信第二一二号で次のように報告している。

「先般印度聖跡等歴遊の途次当地に立寄りたる名古屋市伊藤次郎左衛門氏本使来訪の際当国の内外情勢並に日暹両国関係等に付種々談話を重ねたる未将来両国間緊密不離の関係を樹立する為には我国精神及物質文化の宣伝に依りて上下暹羅国民の対日依存觀念を一層涵養すること最も必要にして殊に青年の本邦留学を勧奨するを以て其の最も根本的な急務とする所以を説き而して

之れが為には篤志家の出資を仰ぎて奨学資金を設定して毎年継続的に優秀学生を本邦に送ること極めて望ましき旨の卑見を述べ考慮を求めたる処同氏は大に右卑見に共鳴して右は頗る国家的意義深きことにして一年一万円程度の出資を以て足るものあらば何等困難なきことと思惟するを以て自分今回暹羅訪問の機会を得たる記念として『やらせて戴くべし』とて早速実行方快諾を得たり。而して同氏は当方に於て本件具体的計画を樹て之を名古屋商工会議所会頭岡谷惣助氏宛送付方希望せられたるに依り本使に於て不取敢別紙の通試案を作成したる処元来本件の如きは本使限りに於て之を運ぶこと決して適切にあらざるのみならず別紙試案を完成するには文部当局又は各学校当局の打合を要する点も少からず其他にも考慮を要する点多々なりと思考せらるるに付委細別紙に就き御査閲の上前記岡谷氏又は本年末迄には帰朝の筈なる伊藤氏と連絡して本件至急具体化するやう御配慮相煩度尚ほ本件は明年三月当国諸学校学年末に於て第一回の選抜を行ひ得るやう相運び度希望なるに付御含の上進捗方御手配有之様致度し。」(国立公文書館、文部省59.3A32-62458「外国人留学生、昭和九年十一月〜昭和二十二年四月、第一冊」もしくは、外交史料館I.1.2.0.3-1)

伊藤次郎左衛門という名は、名古屋の松坂屋主が歴代襲名したもので、この次郎左衛門氏は、一九四〇年一月二十五日に享年六十三歳で亡くなった方である。この当主は、アジアとの交流に熱心で、矢田部公使の勤めに応じ、タイからの留学生受け入れに私財の一部を投じることを快諾

したのである。矢田部公使は直ちに留学生受け入れの詳細な試案を作成し、本省に提出した。本省と伊藤との間の交渉ののち、一九三五年三月三十日に伊藤次郎左衛門は、外務省を訪問し、矢田部試案に修正を加えた案を示した。それによれば、大学入学者及大卒者を受け入れること、日本での受け入れ大学・専門学校は名古屋市に立地しているものに限ること、および、タイ人留学生に奨学金を支給して日本に留学させる事業を主目的とした名古屋日暹協会を設立する、というものであった。同年七月十二日に伊藤次郎左衛門名古屋日暹協会長は、桑島主計外務省東亜局長に対して、名古屋日暹協会は暹羅国学生で日本に留学する者に対して奨学金を支給し留学上の便宜を図るので、名古屋医科大、第八高等学校、名古屋高等商業学校に入学させる留学生を各校当たり一名計三名選定すること、かつ上述各学校との連絡調整をすることを依頼した。七月十六日付けで外務省は、矢田部公使に候補者銓衡を依頼した。これを受けて、矢田部公使はシャム文部省に募集を依頼した。同文部省が試験成績によって絞り込んだ九名のなかから、公使館として人物考査および日本人医師による身体検査を実施した。選考の結果、名古屋医科大に入学させるべき適任者はおらず、八高理科志望者として二名、高商入学志望者として一名計三名を選抜し、同年十二月二十一日付けで本省に報告した。桑島外務省東亜局長は、十二月二十四日付けで、伊藤名古屋日暹協会展長に三名の候補者について報告した。三名の留学生の銓衡は、矢田部公使の公使としての最後の仕事となった。外交記録(外交史料館I.1.2.0.3-1)からは、自分の在任中に詮

衡を無事完了させたいという公使の熱意が伝わってくる。一九三六年二月初、矢田部公使が詮衡した三名の留学生は、日本に到着した。この後も、三七年と三九年に伊藤名古屋日暹協会長の依頼により、在タイ日本公使はシャム文部省を通じて留学生の公募を行い、三七年には二名を詮衡、三九年にも二名を詮衡して名古屋に送り出した。

矢田部公使は一九三六年初め、公使を離任した。帰国後、国際学友会の理事に就任した。国際学友会理事会は、一九四〇年六月二十日に、組織強化のために財団法人に組織換えを図ることを決定し、矢田部理事ら三理事を財団法人設立代表者に任じた。同年十二月六日に財団法人設立が許可され、同時に国際学友会は外務省から内閣情報局の所管に移った。四一年一月十五日の財団法人国際学友会の第一回理事会で、矢田部理事は専務理事に選出された。専務理事は、会長近衛文麿公、理事長宮川米次に次ぐポストであり、国際学友会の運営の衝に当たることとなった。

この頃、矢田部は、国際学友会が外務省補助金を得て、日本人東南アジア専門家を育成することを計画し、国際学友会矢田部理事の名で、外務省に「語学留学生派遣に関する件」と題した次のような提案を行っている。即ち、「最近帝国の大東亜共栄圏建設工作が逐次其の緒に就かんとしつつあるに当つて特に痛感せらるるは是等共栄圏内の各方面に活動すべき人物養成の急務なることである。東亜共栄圏内諸民族国の言語を正確且つ自由に駆使し得る日本人は現在に於ても真

に寥々たるものあるは甚だ遺憾に堪へざる所にしてこの状態を以てしては日本人が東亜共栄圏内諸民族の文化思想感情を正當に理解し又是等諸国に於ける政治経済産業等各般事情の真相を精細に知得することは出来ない筈である。而して右の理解や智識が充分であるにあらざれば共栄圏の建設確保に必要且つ適切なる施策を樹立し且つ之を有効に遂行することは到底期待し得べくもないのである。外国語の習得には相当の年月を要することは勿論であつて而してそれが長年月を要すれば要する程其の着手の速かなるを要する次第なること亦勿論である。去りとして単に筆舌の奨励のみを以てして青年をしてこの重大なる使命に赴かしむることは甚だ困難である。仍て国際学友会は身体強健志操堅真なる有為の青年を求め学費を支給して東亜共栄圏内諸国に派し夫々の言語を完全に習得せしむると共に国内諸般の事情に通曉せしめ以て国家有用の人材を養成することに着手せんとするものである。語学留学生の数は多々益々弁ずる次第ではあるが経費の関係もあるから差当り小規模に之を開始し成績に徴して逐次増員することとすべく……」(外交史料館I1201)、と。具体的には、ベトナム、タイ、ビルマ、マレー語の各言語に付き毎年一人、中卒程度の青年を公募により厳正に選考し、現地に三年程度派遣し、在外公館もしくは留学国の関係政府当局の監督下において指導することを提案したものであった。

日本人の東南アジア専門家を養成したいという矢田部の上述の構想は、タイとの間の学生交換協定という形で実現を見ることとなった。

学生交換協定等締結のため、矢田部専務理事は、一九四一年十一月十五日夜東京を発ち国際学友会の奥田直一主事、山口武囑託とともに神戸から海路サイゴンに向い、サイゴンから空路バンコクに入った。

タイに到着したのは、開戦直前の日タイ関係が微妙な時期であり、日本側から何らかの密命を帯びて来タイしたと解釈する外国人研究者もいるが、矢田部は国際学友会の用務以外には特別な任務は帯びていなかった。矢田部専務理事は国際学友会を代表して、旧知でもあるタイ文部省代表の文部次官プラ・ティーラナサーンとの間に、四二年一月十九日に「日本泰両国間学生交換協定」に調印し、同時に泰国学生招致に関する文書および教員並に学生見学団交換に関する文書を交換した。泰国学生招致に関する上述文書において、矢田部専務理事はシン・ガモンナーウィン文相に対し次のように述べている。即ち、「国際学友会は日本国に留学する諸外国人学生のために必要な各般の援助及び便宜を提供して留学の目的を完全に達成せしむることを以て使命とし設立以来逐年良好なる成績を収め来り候、殊に本会関係の学生中貴国学生が常に其の過半数を占め来り居る事實は両国の親善関係に鑑み欣快至極に存する処に有之候 然る処今般貴我両国間に攻守同盟の締約調印せられ政治上経済上並に軍事上最も緊密なる提携成立したるに付ては此際文化的領域に於ても亦両国の関係一層緊密なるべきこと自然の情勢なるは御同感可有之ことと相信候」(外交史料館 I.1.101)、と。

矢田部専務理事は、一月二十二日にバンコクからサイゴンに向けて出発し、二月二十六日に空路帰京した。彼は、帰国後直ちに「日本泰両国間学生交換協定」に基づき、タイに派遣する交換留学生男性三名の公募に着手した。大卒者もしくは専門学校卒業者を対象とし、分野は特に限定しなかった。五月十五日の締め切りまでに三二名の応募があった。応募者のなかには、宮城音弥など後の著名学者の卵が何人か含まれていた。矢田部専務理事を委員長とした銓衡委員会は、面接ののち、富田竹二郎(二十四歳、大阪外国語学校卒、タイ言語学専攻)、河部利夫(二十九歳、東北帝国大卒、タイ国近世史専攻)、森良雄(三十一歳、九州帝大卒、熱帯地外科医学専攻)の三名を交換留学生として選んだ。選ばれた三名は四二年九月二十五日にはバンコクに到着し、それぞれの研究を開始した。戦後、富田は大阪外国語大学、河部は東京外国語大学のタイ語教授に就任し、戦後における日本のタイ研究の基礎を築いた人物として知られている。現在六十代後半以上の日本のタイ研究者の殆どは、タイ研究の発祥時において、富田先生もしくは河部先生の世話になっている。この意味で、矢田部は、戦後日本のタイ研究者育成という面でも大きな功績を挙げたと言いうことができるのである。なお、一九四四年三月で、矢田部は専務理事を退任し、理事に戻った。

留学生事業に関する、戦中の矢田部の仕事として特筆すべきものがもう一つある。それは、一九四三年九月から翌年四月まで日泰学院の院長に就任したことである。日泰学院は、国粹主義者

の青年、大屋源幸が、元首相林銑十郎大将、安岡正篤らを担いで、一九四〇年三月に創立したもので、タイからの留学生に宿舍を与え教育を施すことを目的としていた。日泰学院は、四二年一月に世田谷区上北沢に五〇〇〇坪の土地を購入し、本館の建設を開始した。四三年九月に林銑十郎院長が、本館の完成を見ることなく死去した後、矢田部が後任の院長に就任にしたのである。この時に日泰学院は、大東亜省より財団法人として認可され、同省の外郭団体になっている。同年十二月八日には、本館が竣工し、この日、矢田部院長は、ルアン・ウィチット大使、青木大東亜相代理東光南方事務局政務課長、石射特命全權大使、ビハリ・ボースら三〇〇名を迎えて落成式を挙行した。一〇〇〇坪の建坪をもつ同館は、木造ながら学生室一六〇室、講堂なども完備したものであった。(井坂三男(日泰学院主事)「日泰学院・興亜同学院紹介」、『日本語』第四卷一号、一九四四年十一月号、三八―三九頁)しかし、矢田部は四四年五月には院長を辞したように、四四年五月七日に開かれた日泰学院の第一回総会では、塩野季彦(元司法大臣)が院長、石射が副院長に、田端が理事長、大屋が専務理事に選出されている(石射猪太郎『石射猪太郎日記』中央公論社、一九九三年、七二三、七二七頁)。

四四年春に国際学友会専務理事、日泰学院院长を辞したのちも、矢田部は日本タイ協合理事長の職には留まった。矢田部が日本タイ協合理事長に正式に就任したのは、四一年八月であった。記録によれば、一九四〇年十一月に矢田長之助(元暹羅公使)日本タイ協合理事長が死去したの

で、同理事会は、同年十二月二十三日に矢田部常務理事を理事長代理とすることを決定し(『日本タイ協会会報』第二二号、一九四一年三月、一五二頁)、翌四一年八月十三日の理事会で、正式に理事長に選出した(『日本タイ協会会報』第二四号、一九四一年八月、一五三頁)。なお、一九二七年十二月二十日の発足以来、日本タイ協会の総裁は、秩父宮殿下、会長は近衛文麿公爵が在任した。理事長は交代が続き、矢田部は五代目に当たった。因みに初代理事は同会創立の中心となった大倉喜七郎男爵、続いて岡部長景子爵、二荒芳徳伯爵、矢田長之助、矢田部保吉の順である。矢田部が理事長を辞したのは、四五年六月で『日本タイ協会会報』第四三号には、辞任理由を疎開のためと記している。更に、同会報の会員動静の欄は、「矢田部保吉氏、渋谷自宅罹災、山口県大島郡小松町小松開作二三九へ転居」(『日本タイ協会会報』第四三号、一九四六年二月、一三頁)と記している。

本稿で示したように、矢田部公使は外交官としての本業の外に、日本におけるタイ研究の先達として高水準の業績を遺された。また、今日隆盛を誇る日本の留学生受け入れの基礎を作られた。更には、タイとの留学生交換を実現され、戦後における日本のタイ研究の指導的人物を育成された。これら功績は、敗戦によって潰えることなく、却って戦後において一層輝きを増した。本稿で取り上げたものは、矢田部公使の様々な業績のほんの一端に過ぎないが、タイ研究に従事している筆者にはそれだけでも、偉大な功績と思われるのである。

特命全権公使 矢田部 保吉

2002年12月25日 第1刷発行 限定130部

編著者 矢田部 会
発 行

制 作 個人書店 銀座店

〒104-0061 東京都中央区銀座5-1 銀座ファイブ2F

電 話：03-5537-1271

FAX：03-5537-1272

© Yatabekai 2002 Printed in Japan
ISBN4-86091-044-3 C0095